

2章 中世Ⅱ

問題

【1】

解答

問1 (1) ロロ (2) ノルマンディー (3) ウィリアム (4) ヘースティングズ
(5) シチリア (6) イスラーム (7) 重量有輪 (8) 賦役 (9) 保有
(10) 弱

問2 スカンディナヴィア半島やユトランド半島

問3 アングロ＝サクソン人が5世紀前半に大陸からブリテン島に移住し七王国を建てた。
これらを829年にエグバートが統一し、9世紀末にはアルフレッド大王がノルマン人の侵入を撃退した。1016年にデン人のクヌートに占領され、その後一時アングロ＝サクソン朝が復活したが、1066年にノルマンディー公ウィリアムに征服された。(150字)

問4 征服により建国されたため、早くから王権が強かった。(25字)

問5 耕地を春耕地・秋耕地・休耕地に三分し3年で一巡する輪作で、地力の低下を防いだ。
(39字)

解説

ノルマン人の各地への移動と、中世ヨーロッパの農村について扱った問題。論述問題を含めて基本的な問題が中心なので、問1・問2での失点を最小限に押さえた上で、論述問題では部分点を取りにいくというよりも、完答をめざすつもりで解答作成に取り組みたい。

問1 (1)～(3) ノルマン人の首長ロロは故国のノルウェーを離れ、北フランスのノルマンディー地方を略奪したが、西フランク王シャルル3世と封建関係を結び、911年に初代のノルマンディー公として封土を得た。この地はノルマンディー公ウィリアムがイングランド王となってからは、イングランド王の支配領域となったが、13世紀にフランス王国によって併合された。

(4) ヘースティングズはイギリス南東部の都市で、1066年にウィリアムがハロルド2世をこの近郊で破り、ノルマン征服(ノルマン＝コンクエスト)を完成させた。

(5)・(6) 地中海に進出したイスラーム勢力は9世紀にはシチリア島を奪い、10世紀には同島はファーティマ朝の支配下となった。11世紀後半にはノルマンディー公国出身のルッジエーロ1世がシチリア島を奪い、1130年にはルッジエーロ2世がシチリア島と南イタリアに両シチリア王国を建てた。この国はラテン・ギリシア・イスラームの諸文化をたくみに内包し独自の発展を遂げるとともに、中世西欧世界とイスラーム世界(イスラーム文化)が接触する地ともなった。

(7) 数頭の牛や馬に引かせた重量有輪犁の使用が11～12世紀に広まると、耕地の形態も牛や馬が方向転換しやすいように柵のない開放耕地となり、耕地全面を重量有輪犁で共同犁耕した後に、細長い長方形の地条に分けられ農民に分配されることとなった。

(8)~(10) 賦役とは労働地代とも呼ばれ、週の数日を領主直営地で労働すること。問題文にある通り、この古典荘園経営が、領主直営地を農民に貸与し保有地（農民保有地）とし、現物や貨幣による地代を要求する純粹（地代）荘園へと変化する。このことは領主と農民の関係を、従来的人格的な支配－従属の関係から、地主－小作人的な経済的つながりへと変化させ、農民の領主への人身的従属は弱まった。

問2 ノルマン人は北方系のゲルマン人で、現在のスカンディナヴィア半島やユトランド半島周辺地域に原住していた。彼らは8世紀頃にデンマーク、9世紀末にノルウェー、10世紀頃にはスウェーデンの地に、それぞれ王国を形成していった。

問3 解答例中に示した年代は必須であるので覚えておくこと。西ゲルマン人に属するアングロ＝サクソン人が5世紀中期以降にブリテン島に渡り七王国（ヘプターキー）を形成し、829年に七王国の1つであるウェセックスの王エグバートがイングランドの統一を達成した。9世紀末のイングランド王アルフレッドはデーン人（デンマーク地域からイギリスを攻めたノルマン人）を撃退する。しかし1016年にはデーン人の王クヌート（カヌート）がブリテン島を征服し、デーン朝を開いた。クヌートはスウェーデンとノルウェーの一部も征服し“北海帝国”と呼ばれる支配域を形成したが、彼の死後、各地は自立し、ブリテン島のデーン朝も1042年に倒れた。

問4 ノルマンディー公ウィリアムの征服によって生まれたイギリスの封建制度は、この「征服」という行為により大陸とは異なる特徴を有することとなる。ウィリアムは征服後に全国土の調査を行い、それをドゥームズデー・ブックにまとめた。この調査は国王ウィリアムから直接に封土を受けた者の土地に加えて、直接受封者の陪臣（^{ぼいしん}臣下の臣下のこと）の土地にも行われ、文字通りイギリス全土に国王の力が及んでいることを示している。また、ウィリアムは直接受封者と陪臣を集めて国王である彼への忠誠を誓わせた。これらの状況は大陸部の封建制度の下で見られる「臣下の臣下は臣下ではない」という状況とは大きく異なり、征服王朝であるイギリスの封建制が早期から集権的性格を強く有していたことを示している。

問5 三圃制は開放耕地制とともに発達した。春耕地では大麦や^{えんばく}燕麦などが、秋耕地では小麦やライ麦などが播かれた。

【2】

解答

設問1 A イ B エ

設問2 (1) ア (2) エ (3) オ (4) イ (5) ウ (6) エ (7) ウ

解説

中世ヨーロッパ世界の成立を、ローマ帝国からの継続の上で捉え、なおかつイスラーム世界やビザンツ帝国の動向をも踏まえた総合的な問題。問われていることは基本的なものが多いので、全問正解をめざしたい。

設問1 A 「東方世界は文化を育てる栄養源」に続く部分に空欄が設定されているから、ここに当てはまるものはいわゆる西欧世界に属する都市ではないことがわかる。よってまずアのラヴェンナは削除できる。残った選択肢はコンスタンティノープル、アレクサンドリア、

アンティオキア， ダマスクスであるが， 文脈からローマ文化を継続する地中海世界をさしているため， 東西に分裂したローマ帝国の片割れであるビザンツ帝国の都， コンスタンティノープルを選ぶのが最も妥当である。

B ここに当てはまる人物は814年に亡くなったということなので， 一番手っ取り早い推測の方法は， 800年にレオ3世の戴冠を受けたフランク王を考えることである。したがってカール大帝が正解となる。

設問2 (1) これもすぐにわかってほしい。イトウは中世修道院運動の中でそれぞれフランチェスコ派とドミニコ派を開いた人物である。

(2) メロヴィング朝の始祖はクローヴィスである。同じフランク王国でもカロリング朝の創始者小ピピンと間違えないこと。クローヴィスの業績としてはもう1点， アタナシウス派への改宗もチェックしておく必要がある。

(3) いわゆるカロリング＝ルネサンスの中心人物を挙げればよい。カール大帝がイギリスからわざわざアーヘンの宮廷まで招聘した人物はだれか。

(4) メロヴィング朝の宮宰カール＝マルテルが活躍したトゥール・ポワティエ間の戦いの年代を選べばよい。

(5) 代表的なビザンツ皇帝の業績については確認しておくこと。この選択肢の中ではエのウルバヌス2世がローマ教皇で， ビザンツ皇帝ではない。

(6) 中世ヨーロッパの封建制のもととなったのは， ゲルマン的制度の従士制と， ローマ末期の恩貸地制の2つである。頻出事項なので注意すること。

(7) 800年のカールの戴冠は中世ヨーロッパ史上， 最重要事件の1つである。その意義もしっかりと確認しておくこと。これにより， フランク王国とローマ教会の提携による中世ヨーロッパ世界， ビザンツ皇帝の治めるビザンツ帝国， イスラーム勢力の3勢力が地中海を挟んで鼎立し， 3つの文化圏が成立することになる。

【3】

解答

- (1) (c) (2) デーン人 (3) クヌート (カヌート) (4) ドゥームズデー・ブック
(5) デンマーク

解説

ノルマン人および北欧の動向については， 教科書や参考書でも断片的に記載されているので， 問題として問われるとなかなか正解できない場合が多い。歴史地図やテキストの説明は周辺地域まで目を配り， 主要地域の歴史とどのように関連するのか考えながら情報を整理する習慣を， 早いうちからつけておこう。

(1) (a)のクローヴィスの統一は481年。(b)のメルセン条約は870年。(d)のオットー1世の戴冠は962年。

(2) 基本問題。デーン人の侵入については， 地図でも確認してイメージをつかんでおこう。

(3) 基本問題。デーン人の王クヌートはデンマークやノルウェー地域に加え， 1016年にはイングランドも征服してデーン朝(1016～1042)を開いた。しかしその死後は再びアングロ

=サクソン人が王位に即いた。

- (4) やや細かいが、早慶大志望者なら覚えておいてもよい用語だろう。1066年、フランスのノルマンディー公ウィリアムはイングランドに上陸し、ヘースティングズの戦いに勝利してウィリアム1世としてノルマン朝を開いた。これをノルマン征服（ノルマン＝コンクエスト）という。その際、彼は支配権の確立をはかるため、徴税の目的から全国的な土地台帳であるドゥームズデー・ブックを作成させた。
- (5) ユトランド半島というキーワードからデンマーク、とわかる程度の地理感覚は養っておいてほしい。ノルウェー、デンマーク、スウェーデンの北欧3国は、1397年、デンマーク王家を中心に同君連合を結成した。この連合ではデンマーク女王マルグレーテが支配権を握り、カルマル同盟と称した。カルマルはスウェーデンの町名である。

【4】

解答

- ① テオドリック ② ヴァンダル ③ ノヴゴロド国 ④ ルーシ（ルス）
⑤ シチリア ⑥ ルッジェーロ2世 ⑦ マジャール人 ⑧ レヒフェルト
⑨ 962 ⑩ ホスロー1世 ⑪ ギリシア正教 ⑫ キエフ

解説

ローマ帝国分裂後のヨーロッパ諸地域を取り上げた問題。西欧・東欧それぞれの歴史を、相互の関連性にも注意しながら確認しておきたい。空欄では基本的なものからやや難しいものまで問われている。まずは基本的な内容を確実に押さえた上で、やや難しい問題を一間でも多く正解していけるように、丁寧な学習を進めてほしい。

- ① 東ゴート人は元来、黒海沿岸に居住していたが、フン人に圧迫されて4世紀後半に移動を開始した。さらにテオドリック王（位473頃～526）に率いられてイタリアに入り、オドアケルを倒して東ゴート王国（493～555）を建てた。
- ② ヴァンダル人はオーデル川流域付近に居住していたが、4世紀末に移動を開始してガリアに入った。さらに一時イベリア半島にも定着したが、西ゴート人に追いやられて再び移動を開始し、ジブラルタル海峡を渡ってアフリカ北岸にヴァンダル王国（429～534）を建てた。
- ③・④ ノヴゴロド国はヴァイキングの首長リューリク（ルーリック）を中心としてスラヴ人居住地域に建てられた商業都市国家で、862年に成立した。ロシアの『過ぎし歳月の物語』という年代記によれば、先住のスラヴ人たちは、リューリクらノルマン人をルーシ（ルス）と呼び、自らの統治者として招いたとされている。
- ⑤・⑥ シチリア島は東ローマ帝国、イスラーム、そしてノルマン人に支配された地域で、パレルモは文化交流の最先端都市として繁栄していた。ロベルト＝グイスカルドとその弟ルッジェーロ1世を指導者としたノルマン人は、南イタリアからシチリア島に進出し、パレルモを占領した。ルッジェーロ1世の子ルッジェーロ2世（位1130～54）は12世紀前半、南イタリアも支配下に入れた両シチリア王国（1130～1860）を建てた。
- ⑦～⑨ 9世紀末にパannonia地方へと進出したアジア系遊牧民のマジャール人は、10世紀になるとイタリア半島やバルカン北部など、西欧への侵入をさらに進めた。しかし955年、

レヒフェルトの戦いでザクセン朝のオットー1世に大敗すると西方進出を諦め、10世紀末にはパンノニアにハンガリー王国を建てた。一方、オットー1世は、マジャール人の撃退やイタリア制圧を評価され、962年、ローマ教皇ヨハネス12世から戴冠されて神聖ローマ帝国の初代皇帝(位962～73)となった。

- ⑩ ビザンツ帝国のユスティニアヌス(位527～565)は、ササン朝のホスロー1世(位531～79)と戦った。この両国の抗争は、一進一退を繰り返した。
- ⑪・⑫ ビザンツ帝国の国教となったギリシア正教と、ローマ教会のカトリックは、スラヴ人居住地域で次第に浸透していった。キエフ大公ウラディミール1世は、10世紀末にビザンツ皇帝バシレイオス2世の妹と結婚したことを契機に、ギリシア正教を正式に国教として採用した。

【5】

解答

- ① テオドシウス ② ドミナトゥス ③ 726 ④ 貨幣
⑤ サン＝ヴィターレ ⑥ ユスティニアヌス ⑦ アルメニア ⑧ ブルガール
⑨ レオン3世 ⑩ マケドニア ⑪ 1453

解説

分裂したローマ帝国の片割れ、ビザンツ帝国に関する問題である。問題文はよくまとまっているが、設問ではかなり細かい事項まで問われている。

- ① テオドシウスは統一ローマ帝国最後の皇帝となった人物。392年にはアタナシウス派のキリスト教を国教とした。376年にはすでにゲルマン人がドナウ川を渡り、ローマ帝国内への移住を開始していたが、テオドシウスは教理論争に熱中していたため、ゲルマン人の帝国内定住を容認した。このことがローマ帝国の衰退に拍車をかけたとされている。テオドシウス没後の395年、帝国領は2人の子により分割され、東半分は兄のアルカディウスに、西半分は弟のホノリウスに相続された。こうしてローマ帝国は東西分裂という結果をたどった。
- ② ビザンツ帝国では、皇帝の即位式においてデーモスと呼ばれる役人が「ローマ人の皇帝万歳」と唱える儀式を行っていた。これは“皇帝は市民の第一人者”という古代ローマの理念を受け継いでいることを示しているが、実際にはビザンツ皇帝は絶対的な権力者であった。これはローマ皇帝が絶対的権力を持ち始めた後期帝政からの連続として捉えることができる。3世紀の軍人皇帝時代は284年のディオクレティアヌスの登場で終止符が打たれた。彼は皇帝の地位を“ドミヌス(「主人」の意)”へ変えることに専念し、ここからプリンキパトゥス(元首政)からドミナトゥス(専制君主政)と呼ばれる政治体制へと変化していった。
- ③ ビザンツ皇帝のイデオロギーは、ローマ皇帝コンスタンティヌスに始まるといっても過言ではない。それは皇帝崇拜とキリスト教信仰とが結び付いたからである。“神の名による支配”は、マルクスをして“最悪の国家”と呼ばせた。8世紀のレオン3世は離婚を禁止する法令を發布したが、これは聖書の言葉にあるから、との理由であった。さらに726年には聖像禁止令を發布している。これには宗教的理由からだけでなく、大土地所有者となって皇帝の権力を脅かしつつあった修道院の力を弱める意図もあった。レオンの子のコンスタン

ティノス5世は、父の政策を受け継いで“偶像崇拜”を徹底的に弾圧した。

一方、ゲルマン人教化のために聖像を必要としたローマ教会はこれに反発して、のちの東西教会分裂の端緒となる。ビザンツ帝国内では、イコノクラスムと呼ばれる偶像破壊運動の嵐が吹き荒れたが、843年には聖像禁止令が撤回され、聖像崇拜は正統とされた。

西ローマ帝国の崩壊以降、ローマ教会はビザンツ帝国の従属下に置かれていたが、ランゴバルド人の北イタリア進出によりその影響力は弱まっていた。さらに、カロリング朝に交代したフランク王国が、ローマ教会を保護する新たな世俗権力として登場していた。これらがローマ教会のビザンツ帝国に対する強硬な反発を生んだ背景となっていた。

- ④ ビザンツ帝国では貨幣経済が衰退することなく存続していた。帝国内では農業・手工業が盛んに行われ、それらは輸出品として取引された。さらに首都コンスタンティノープルは陸・海路の結節点に位置し、交易上の要衝として繁栄していた。このように、首都を初めとしたビザンツ帝国内の諸都市では経済活動が活発であり、その活動を維持するため、貨幣は不可欠な要素であった。
- ⑤ ドームを使用したビザンツ様式と呼ばれる代表的建築物には、コンスタンティノープルのハギア＝ソフィア聖堂、ラヴェンナのサン＝ヴィターレ聖堂、ヴェネツィアのサン＝マルコ聖堂が有名である。前の2つは6世紀に建築され、後者は9世紀に起工されて11世紀にビザンツ様式に改築された。ビザンツ文化における絵画（画法）としては、モザイク壁画、フレスコ画、イコンが挙げられる。モザイク壁画は角状の硝子や貝殻などを壁にはめ込む画法で、フレスコ画は漆喰が乾く前に水彩絵具で描く画法、イコンは宗教画をさす。サン＝ヴィターレ聖堂にあるユスティニアヌスやその皇后、廷臣たちを描いたモザイク壁画は有名である。
- ⑥ ユスティニアヌス（位527～65）はヴァンダル王国、東ゴート王国を滅ぼし、西ゴート王国からもイベリア半島の一部を奪回するなど、旧ローマ領の回復に尽力した皇帝。しかしその治世後半では戦争による国力の疲弊が見え始め、その死後、ローマ帝国は再び劣勢となった。
- ⑦ 難しい。解けなくても問題はないだろう。アルメニアは小アジア東部、黒海とカスピ海の間位置する地域で、現在はアルメニア共和国がある。古代オリエントの時代にはウラルトゥ王国が存在していたが、アッシリアのサルゴン2世の攻撃を受け衰退し、その後滅亡した。時代が下るとアケメネス朝、アレクサンドロス帝国、セレウコス朝、パルティア、ローマ帝国による支配を次々に受けた。さらに5世紀以降はビザンツ帝国とササン朝・イスラームとの係争地になるなど、古代より不安定な政治情勢下に置かれた地域であった。また、アルメニアは宗教圏としてはイスラームに属するが、451年のカルケドン公会議で異端とされたキリスト教単性論派のアルメニア教会が強い力を有する地域でもある。
- ⑧ バルカン半島に進出したブルガール人は681年にブルガリア王国を建設した。東欧・バルカンの中で最も早い時期に建国していることに注意しよう。ビザンツ帝国の抗争といえば、ササン朝やイスラーム勢力がすぐ頭に浮かぶが、ブルガリアも忘れてはならない。ビザンツはイスラームを使ってブルガリアと対決させ、その一方ではブルガリアと結びイスラームを叩くことを忘れなかった。なお、ブルガリアは9世紀にギリシア正教へ改宗している。
- ⑨ ビザンツ帝国は幾度かイスラーム勢力による侵略を受けているが、ウマイヤ朝によるコン

スタンティノーブル攻囲は、674年～80年、そしてレオン3世が抗戦の指揮を執った717年～718年の2度あった。イサウリア朝のレオン3世は726年の聖像禁止令と併せて覚えることが多いが、この事項も重要なので忘れずに押さえておきたい。

⑩ マケドニア朝は、ヘラクレイオス1世(位610～41)の死後衰退していたビザンツ帝国の国力回復を進めた。マケドニア朝初代のバシレイオス1世(位867～86)はクレタ島やキプロス島、南イタリアなどをイスラーム勢力から奪回し、その勢力圏を拡大することに尽力した。歴代皇帝で最も在位期間が長かったバシレイオス2世(位976～1025)は積極的な対外拡張を進めた。“ブルガール人殺し”のあだ名を持つ彼は、1018年に第1次ブルガリア帝国を滅亡させるなど、ユスティニアヌス帝に次ぐ帝国史の頂点を極めた。

⑪ バシレイオス2世の没後、ビザンツ帝国は国内外の動揺で一時混乱したが、11世紀後半に成立したコムネノス朝の統治下で帝国の建て直しが進んだ。プロノイア制の導入によって帝国の封建化が進展し、皇帝と貴族の連携が深まり国内は安定した。11世紀末にはローマ教皇に十字軍を要請し、西欧世界と共闘してイスラーム勢力からの失地奪回をめざした。

しかしその安定は長く続かず、13世紀以降、ビザンツ帝国は劣勢に陥った。共闘していたはずの十字軍によって首都コンスタンティノーブルが奪われ(第4回十字軍;1202～04)、帝国は一時滅亡した。1261年にコンスタンティノーブルを奪還して帝国は再建されたが、14世紀にはバルカン半島の大半をセルビア王国や第2次ブルガリア帝国に、1362年には繁栄していたアドリアノーブルをオスマン帝国に、それぞれ奪われるなど、その勢力の衰退は顕著であった。内部においては13世紀頃からプロノイア制の変質が起り、封土として委任されていた国有地の世襲が認められた。これによって貴族の自立傾向が強まり、皇帝権の弱体化がさらに進んだ。最終的に1453年、ビザンツ帝国は小アジアに興ったトルコ系イスラーム勢力のオスマン帝国による攻撃を受け、コンスタンティノーブルを奪われて滅亡した。

【6】

解答

A 1 ホ 2 ハ 3 ニ 4 ニ

B 1 エウセビオス 2 ラヴェンナ 3 1054年

解説

ビザンツ帝国に関連した雑題。Bの記述問題は基本的なのですべて正解できてほしい。間違えやすいAの記号選択問題で一問でも多く正解できるように、学習を進めたい。

A 1 ディオクレティアヌス(位284～305)は最後のキリスト教徒大迫害を行ったことでも有名な皇帝。ニコメディア南部の地で開催されたのはニケーア公会議(325)で、この会議はコンスタンティヌス帝(位306～37)が自ら開催した。

2 ホスロー1世の在位は531年～79年である。クローヴィスの改宗は496年の出来事であるため、時期に合わない。その他の選択肢については、アヴァール人が中央アジアに進出したのは6世紀以降、突厥の成立は552年、ロンバルド(ランゴバルド)王国の建国は568年、東ゴート王国の滅亡は555年、ヴァンダル王国の滅亡は534年。

3 ビザンツ皇帝の妹と結婚し、ギリシア正教に改宗したキエフ大公はウラディミル1世(位

980頃～1015)。モスクワ大公国のイヴァン3世（位1462～1505）はビザンツ皇帝の姪と結婚し、ツァーリの称号を得た。間違えやすいので確認しておこう。

- 4 南スラヴ系のクロアチア人は、7世紀頃にバルカン半島に南下し、ビザンツ帝国の支配下に入った。スラヴ人のキリスト教受容の状況や彼らが勢力を築いた地域、その後の動向については、復習を兼ねて一度整理しておくといいたい。
- B 1 問題文にあるような考え方を神寵^{しんちやうてい}帝理念といい、ビザンツ皇帝の理念だけでなく、近世ヨーロッパの王権神授説にも影響を与えている。エウセビオスの著作としては『教会史』のほかに『年代記』も覚えておきたい。
- 2 ラヴェンナはアドリア海に面したイタリア半島の都市。ユスティニアヌス帝時代にはビザンツ帝国領だった。
- 3 聖像崇拜の可否を巡って東西教会が対立したのは8世紀だが、最終的な分裂はそれから約300年後の1054年に起こった。

【7】

解答

- 問A ① テオドシウス ② ランゴバルド ③ コンスタンティノス5世
④ ピピン（3世・小ピピン） ⑤ 1077 ⑥ グレゴリウス7世
⑦ ハインリヒ4世 ⑧ 1122 ⑨ 1095 ⑩ ウルバヌス2世
⑪ クレルモン公 ⑫ インノケンティウス3世

- 問B a 皇帝教皇主義 b アタナシウス派への改宗 c 聖像崇拜論争（聖像禁止令）
d カロリング朝の創始 e ヴォルムス協約

解説

中世ヨーロッパにおける教皇権と皇帝権の関係について、カールの戴冠による両者の提携に至る背景から、叙任権闘争を経てヴォルムス協約で妥協するまでの一連の流れを押さえた問題である。間違えたところはしっかりと復習すること。

- 問A ① ローマ帝国とキリスト教の関係については、その変化の過程をしっかりと理解しておこう。

(1)キリスト教の成立と弾圧の歴史

ローマのユダヤ総督ポンティウス＝ピラトゥスによるイエスの処刑（後30頃）

ローマ皇帝ネロ（64）やディオクレティアヌス（303）によるキリスト教徒の弾圧

(2)キリスト教のローマ帝国国教化

コンスタンティヌスのミラノ勅令によるキリスト教公認（313）

同帝によるニケーア公会議の開催（325）

テオドシウスによるキリスト教の国教化（380, 392）

の2段階に分けて復習しよう。テーマ史でも問われやすい部分である。

- ② ゲルマン人の移動と定住については、歴史地図でしっかりと確認しておくこと。キリスト教との関係においては、ローマ教皇を圧迫していたランゴバルド人をフランク王国のピピンが攻撃し、奪ったラヴェンナの地を初のローマ教皇領として献じた事件との関連から、ラン

ゴバルド人に注目しておく必要がある。

- ③ これは難問。「8世紀の中期」という時代設定でビザンツ皇帝とローマ教皇との間に生じた事件といえば、やはり726年の聖像禁止令が思い浮かぶだろう。この法令を發布したビザンツ皇帝はレオン3世(位717～41)であるが、この問題文の文脈のその後をたどってみると、③にあてはまる皇帝は、ピピンのカロリング朝創設時、すなわち751年にビザンツ皇帝位にあった人物となる。レオン3世は741年に没し、その子のコンスタンティノス5世(位741～75)がそれに当たる。よって正解はコンスタンティノス5世となる。
- ④ 732年のトゥール・ポワティエ間の戦いにおけるカール＝マルテルの勝利により、のちのカロリング朝とローマ教皇との提携関係は進んでいく。この空欄に当てはまる人物はフランク王国の「実力者」と問題文にはある。つまり国王ではなかった。この人物が抱いていた野望、つまりカロリング朝の創始に向けて、教皇の権威を必要とした、と考えれば、この人物がだれかが特定できよう。
- ⑤ これは単純に年代を暗記していれば得点できる。同時代の他地域について問われることも多い昨今、やはり難関私立大を志すものは、ある程度の年代は覚えておかねばなるまい。
- ⑥～⑧ 叙任権闘争の双方(神聖ローマ皇帝とローマ教皇)の背景とその結果、そしてヴォルムス協約についてはしっかりと理解しておくこと。中世史において頻出である。
- ⑨～⑪ 十字軍に関する事項で受験で狙われやすいのは、教皇ウルバヌス2世によるクレルモン公会議の開催(1095)、イェルサレム王国の建設(1099)、第4回十字軍(1202～04)とラテン帝国の建設(1204)である。
- ⑫ インノケンティウス3世については、今回のように第4回十字軍と絡めて出題されるか、中世の教皇権に関する問題で出題されるかのどちらかが多い。

問B a この問題で問われているのは、ビザンツ帝国では教皇権と皇帝権はどのような位置関係にあったのか、ということである。この両権が分離していた西欧とは違い、ビザンツ帝国では教皇権は皇帝権の完全な支配下にあった。このことを歴史用語で何というか。因みに「教皇皇帝主義」などと間違えて覚えてしまう人も結構多いので注意すること。用語を覚えるのは、その用語の意味を完全に理解してからにしよう。これでは逆の意味になってしまうので、当然試験においては誤答となる。

b ここで問われているのは「聖俗両権力の接近」に関するクローヴィスの行動についてであるから、クローヴィスがローマ教皇に接近するために行った出来事を簡潔にまとめればよい。ローマ人の間に普及しており、カトリック教会が正統としていた教義は何か。またこれに対して当時のゲルマン人が一般的に信仰していた教義は何か。この2点を押さえておくこと。

c 問Aの③を参照。解答では「聖像崇拜論争」としたが、文脈からいってそのものズバリ「聖像禁止令」としても正解とする。この聖像崇拜論争だが、726年に聖像禁止令を發布したレオン3世は、聖像の崇拜を禁じたのであり、聖像そのものの存在を許さなかったわけではない。これが次のコンスタンティノス5世の時代になると、聖像の存在自体を厳禁し、これを破壊することになる。

d 問Aの④を参照。解答では「カロリング朝の創始」と簡潔にまとめたが、もちろん「メロヴィング朝を打倒し、カロリング朝を開くこと」などとまとめても正解である。

e ヴォルムス協約の細かな内容は覚えなくてもよいが、「両者が妥協した」という点につい

ては、どのような妥協がなされたのかまで必ず覚えておくこと。

【8】

解答

問1 a (ト) b (ホ) c (ソ) d (ヲ) e (レ) 問2 f (ツ)
g (ネ) i (タ) 問3 (ワ) 問4 (レ)

解説

9～12世紀の西ヨーロッパに関する問題である。基本的な内容がほとんどなので、確実に正解したい。

問1 a・b 東フランク王国では、カロリング朝の断絶後、有力諸侯の間から国王が選出されていた。ザクセン家のハインリヒ1世の死後、その子であるオットー1世が国王となり、ノルマン人やマジャール人などの異民族の侵攻を防いで名声を高めた。オットー1世は周辺諸侯の勢力を抑え、教皇ヨハネス12世から帝冠を受けて、初代の神聖ローマ帝国皇帝となった。

c 西フランク王国では、カロリング朝の断絶後、パリ伯ユーグ＝カペーが国王に選出されてカペー朝を開いたが、有力諸侯が割拠し、国王の支配はパリ周辺に留まっていた。

d ノルマン人の首長ロロに率いられた勢力は北フランスに侵入し、西フランク王によってノルマンディー公に封じられた。彼らの一部は11世紀末に南イタリアに進出し、12世紀前半には両シチリア王国を建国した。

e ゲルマン人のうち、アングロ＝サクソン人は大ブリテン島に侵入し、5世紀前半には七王国（ヘプターキー）と呼ばれる小王国群を建国した。9世紀前半には、ウェセックスの王エグバートが七王国を統一して、最初のイギリス王国を建てた。

問2 11世紀になると、フランス南東部に建てられたベネディクト派のクリュニー修道院を中心として、教会の腐敗や俗化を刷新する運動が起こった。これを背景として、教皇グレゴリウス7世は聖職売買や聖職者の結婚を禁じるなどの教会改革を行った。改革の中で、聖職者の叙任権は教皇が有するとしたことから、聖職者の任免権を掌握することで教会組織を皇帝支配に組み込もうとする神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世と衝突した。この叙任権闘争は12世紀初めのヴォルムス協約において妥協が成立し、一応の決着を見た。

問3 教皇グレゴリウス7世は叙任権をめぐる衝突したハインリヒ4世を破門した。これを受けて神聖ローマ帝国内の諸侯も皇帝に対し反旗をひるがえしたことから、ハインリヒ4世は屈服し、1077年にカノッサで教皇に謝罪した。

問4 サラディンは1171年にファーティマ朝を滅ぼし、アイユーブ朝を建てた。1187年にサラディンがイェルサレムを奪回したことに對抗し、89年、イギリス・フランス・ドイツなどの西欧連合軍による第3回十字軍が起こされた。しかし、英仏の反目などによってフランスが撤退し、イギリス王リチャード1世が単独でサラディンと戦ったが、結局は講和を結んで帰国した。